

ウルグアイにおける教育改革を通じたネイション・ビルディング

——バレーラ改革からバツジェ期まで——

Nation Building Through Educational Reform in Uruguay: from Reforma Valeriana to Batllista Era

内 田 みどり

Midori UCHIDA

(和歌山大学教育学部)

2017年7月26日受理

Abstract

Ex-colonial countries and/or multi-ethnic countries meet difficulty in nation building. But Uruguay had great success in this problem by educational reform. This Article summarises briefly relationship between educational reform and nation building in Uruguay, based on Jens Hentchke's brilliant study about School Reform in Uruguay. He focused the continuities in change from educational reform of José Pedro and Jacobo Valera to that of Batllismo I also sum up how to invent hero and landscape of which need making imagined community through education and centenarian ceremony.

はじめに

境界線で区切られた領域の中の住民に、「限られた」「主権的な」「一つの共同体として」「たとえ現実には不平等と搾取があるにせよ水平な深い同志愛」で結ばれた共同体を想像させる¹のは、難しい作業である。とりわけ宗主国の都合で勝手に境界線を引かれてしまった旧植民地や多くの移民を受け入れた国、旧世界からやってきた征服者の末裔と先住民や奴隷として連れてこられた黒人たちが今なお支配-被支配の関係にある国では、「国民の創出」は困難を極める。

そうした中でウルグアイは、「国民の創出」に成功した希有な例といえる。ウルグアイはブラジル=ポルトガルとアルゼンチンの緩衝国家として、イギリスの後押しで1828年に独立した。この、ラ・プラタ川のほとりの小さな国は、都市の知識層と農村のカウディーリョ、(アルゼンチンの)連邦主義と中央集権主義と結んだコロラド党とブランコ党、欧州から伝来したアナキズムや社会主義に引き寄せられる労働者と資本家の階級対立など、いくつもの分断を抱え、たびたび内戦に陥り、内戦にはしばしば周辺国やイギリス、フランスが介入した。19世紀のウルグアイで任期を全うできた大統領は2人しかおらず、1868年に起きたブランコ(Blanco)党(現在の国民党, Partido Nacional)の蜂起の際には、コロラド党(Colorado)のフローレス前大統領とブランコ党のベーロ元大統領が同じ日に暗殺されるという悲劇が起きている²。その後1875年から1890年までは実質的には軍政となった。だが、1903年に大統領に就任したコロラド党のバツジェ・イ・オルドーニェス(José Batlle y Ordóñez)は、ブランコ党のカウ

ディーリョ、アパリシオ・サラビア(Aparicio Saravia)が起こした反乱を鎮圧したのち、国民建設と国家建設を同時に行なう困難な改革に着手した。バツジェは男子普通選挙を実現し、行政府に「コレヒアード」といわれる複数人からなる委員会制度を導入して大統領制の勝者総取りの性格を緩和するといった政治改革で政党間の対立を緩和し、8時間労働制や年金制度などの社会立法で階級対立を緩和して、国民統合をめざした。彼によってウルグアイは政治的社会的に安定し、「南米のスイス」「南米の例外」というウルグアイ人の自己認識を形成した。今なお、バツジェは、後述するアルティガスと並んで、ウルグアイにとって正統性の源泉である。

ところで、国民意識の形成に公教育が重要な役割を果たすことは良く知られている。ナショナリズム研究の近代主義者として知られるアーネスト・ゲルナーは、近代社会がその構成員に長期間の訓練をほどこし、読み書き、基礎的な計算能力、基礎的な労働習慣などの資質を共有することを求めていることを指摘し³、「一般的な社会的条件が、エリートの少数派にだけでなく全人口に普及する標準化され同質的で中央集権的に支えられた高文化を促進するとき、教育を通じて容認された輪郭のはっきりした統一的文化が、人々が進んで、時には熱烈に一体化したがるほとんど唯一の単位を構成するという状況が生まれる⁴」という。その意味で、「正当な教育の独占は、正当な暴力の独占よりも重要で集権になる⁵」。さらにキリスト教世界では、公教育の場から教会の影響を払拭することが、個人情報掌握と、神から国家に忠誠心を移し信仰ではなく国家の

ために殉ずる国民を創ることに不可欠であった。

しかしながら、ウルグアイで近代的な教育制度を築いたのはバッジェではない。ウルグアイの「教育の父」はバッジェより一世代上のホセ・ペドロ・バレラ (José Pedro Varela, 1845–1879) である。従来、バッジェはバレラに批判的であると考えられてきた。理由の一つはバレラが軍事政権と手を組んで教育の近代化に乗り出したためだ。これに対しバッジェは多くの原則重視派の知識人層の若者とともに、マキシモ・サントス (Máximo Santos) の独裁に反対する武装蜂起 (ケブラチョの革命, *Revolución del Quebracho*) に加わった。これが彼の政治的な出発点、原点であるとされる⁶。もう一つはバレラが実証主義を信奉していたのに対し、バッジェは唯心論者だったという思想的な違いである。この、バレラとバッジェが対立するという通説に異を唱えたのがイェンス・ヘンチュケ (Jens R. Hentschke) である。彼は、ウルグアイにおける学校改革とネイション・ビルディングの関係を、南米南部の周辺国の動向のなかに位置づけて「横の連携」に注目するとともに、バレラの教育改革とバッジェの改革の連続性に注目する「縦の系譜」に注目して、体系的に研究した、おそらく初めての人物である。本稿では主に彼の研究に依拠して、ウルグアイにおける国民形成と教育について概観する。

1. バレラの教育改革

ウルグアイで初等教育教員の専門化が始まったのは1827年だった⁷というが、そこから一向に進展しないまま19世紀後半を迎えてしまった。この状況を変えたのがバレラである。彼の父親は商人だが親族・姻族には多くの知識人がおり、特に国立図書館と大学を作った大叔父からは大きな影響を受けたという⁸が、思想的に決定的な影響を受けたのはアルゼンチンの作家・教育者で後に大統領となったサルミエント (Domingo Faustino Sarmiento) であろう。サルミエントはアルゼンチンの西欧化を進め、『文明と野蛮』の二分法のもと先住民の絶滅を唱える一方で、内陸のパラナに初の師範学校をつくり野蛮との闘いの最前線に位置づけ⁹、初等教育の拡充に尽力したことで知られる。バレラと、彼の遺志を継いだ兄ハコボによる教育改革は「バレラ式改革 (Reforma Vareliana)」と呼ばれる。

バレラは友人のフェルナンデス (Elbio Fernández) やラミーレス (Carlos María Ramírez) らとともに「民衆教育友の会 (la Sociedad de Amigos de la Educación Popular, SEAP)」をつくる。SEAPは公教育改革の実験場となるべき私立学校を1869年に設立した。また、『民衆の教育 *La educación del pueblo*』(1874) や、『学校法 *La legislación escolar*』(1876) といった著作で教育改革を訴えた。バレラはウルグアイの存続が近隣国との未解決の紛争にかかっているこ

と、それゆえ国家の強化とネイション・ビルディングが必須であるとみなしていた。彼はスイスを範とし、スイスが大国に囲まれているうえに宗教・言語の亀裂がありながら生き残っている鍵は、教育に投資したことで、周囲の列強より人々が繁栄を謳歌していると感じていることだ、と考えた。そして、ラテンアメリカが進歩のために乗り越えなければならない先住民とスペインの遺産を一掃するためにも学校を重要視した¹⁰。

バレラはラトーレ (Lorenzo Latorre) の軍政下で1876年に視学官に就任するが、すぐに、教師のほとんどが外国からの移民で、母国でもととの職業で失敗したあげく教師の資格をとっただけで教師を天職とみなしていないこと、しかも半数が首都に集中しているといった現実直面する。彼は改革の焦点を、公立学校を内陸部に拡大することにあてた¹¹。教育の義務化 (バレラは子どもを学校に行かせない親は処罰すべきだと考えていた) と世俗化も目指したが実現せず、宗教教育は必須で、親もしくは後見人が反対している場合のみ、免除されるのにすぎなかった¹²。彼はまた、農村では授業科目を地方の農牧業経済に合わせるべきであること、全ての私立学校でスペイン語を第一言語として教えるべきことを主張した¹³。

バレラが若くして死ぬと、兄のハコボ (Jacobo) が視学官となり、改革を引き継いだ。ハコボも学校改革とネイション・ビルディングを関連付けていた。移民は世界中からさまざまな政治思想と社会習慣を持ち込み、能力のあるものにとって教員は儲けのある仕事である、と彼は考えていた。モンテビデオ県全体で、ウルグアイ生まれの教師が管理していたのはたった一校だけだったことが彼の関心を引いた¹⁴。そこでハコボが期待したのが(男女共学と)女性教師であるが、これは宗教界右派との対立をもたらし¹⁵。弟のホセも女性が母として、妻として、姉妹として将来の市民の社会化に学校よりも大きな影響を持つことを認識していた¹⁶が、ハコボは、男性教師はより多くの報酬をもたらず職を追い求めているが、女性は他に職がないのでより少ない給与でよい、と女性教師を推した。女性教師への期待の裏には、女性教師の78%がウルグアイ生まれなのに対し、男性教師は33%に過ぎないという政治的理由もあった¹⁷。ウルグアイでは、男子に7年先駆けて女子師範学校が1882年に設立され、主に中流下層の親を持つ地方出身の女子が入学し、卒業後は出身地で教師となることが期待された(入学年齢は女子13歳以上、男子は15歳以上だった)。そして教員養成の分野で大きな貢献をしたのも、マリア・スタグネロ (María Stagnero de Munar) という女性教員だった¹⁸。

2. バッジェの教育改革

バッジェもまたバレラのように学校を通じたネイション・ビルディングを重視していたといわれる¹⁹。む

しろ就任早々、サラビア率いるブランコ党の反乱に直面したバッジェのほうが、より切実に国民統合を必要としていた。

19世紀末のウルグアイは経済的・政治的に不安定で、1890年に誕生した文民政権のエレーラ・イ・オブス(Julio Herrera y Obes, コロラド党)が行った選挙干渉がブランコ党に不信を抱かせ、後継のイディアルテ・ボルダ(Juan Idiarte Borda)政権は1896年の議会選挙ボイコットと1897年のアパリシオ・サラビア(Aparicio Saravia)が指導する武装蜂起を招いた上、ボルダは暗殺されてしまった。上院議長から大統領に昇格したクエスタスは、19県のうち6県をブランコ党の支配下に置く山分け協定で和解を図った。バッジェは、この山分けは国家の統一を損なうと主張していたため、彼が大統領になるとブランコ党が反乱を起こしたのである²⁰。ヘンチュケは、旧副王領再統一をもくろむアルゼンチンがひそかにサラビアを応援していたと指摘している²¹。まさに、国家存続の危機だった。約800人の市民を犠牲にし、政府軍がからくも勝利して1904年9月に和平が成立し、「ようやくバッジェは望んでいたものを手に入れた。コロラドは今や『一つの法、一つの政府、一つの軍隊』を押し付けることができるようになった²²」。

一つの法の下に一つの政府が国民を統合する。領土を一体化する。内陸と首都を結ぶ道路や鉄道をつくる²³ことが統合と一体化のための物理的なインフラ整備なら、内陸部に公立学校をつくることは精神的なインフラ整備であったといえよう。20世紀初頭、外国人が多く住んでいた県のうち、商業地帯であるサン・ホセ、コロニア、パイサンドゥ県にはヨーロッパ系が多く識字率、小学校入学率もより高かったが、北部国境地帯であるアルティガス、リベラ、セロ・ラルゴ県はブラジル系が多く、識字率、小学校入学率も低かった(サルト県も同じ)という²⁴。1905年、債務を内陸初の中高等教育機関設立に使用する法案が議会を通過する。バッジェは全ての県に高校をつくるだけでなく、大学もつくりたいと望んでいた。それらの学校は内陸の人々の「知的、倫理的、社会的向上の強力な要素となるだろう」とバッジェは考えていたのである²⁵。

だが中等高等教育機関よりも先に、初等教育を全国に普及させる必要があった。そして小学校をつくるには教師が必要だった。だが教員養成分野の改革は遅れていた。すでに19世紀末には師範学校をより実践的、効率的、経済的にせよという批判が高まっていた。例えばカリキュラムではフランス語、文法、数学、歴史、地理、音楽などの一般教養は師範で教える必要はなく、デッサン、書道、応用畜産学、農業、肉体労働、体育などに限ればよい。教師としての職業教育では一般・理論教育学、特殊・応用教育学、学校実践、学校法を教えよといった批判である²⁶。寄宿制で男女別の師範

学校は経費がかかる割に修了生が少なく、しかも教職につかない、あるいは出身地へ帰りたいがらない。男子教師が定着しない、良い教員ほど都会へ都会へと流出する、女性教師が地方へ行きたがらないといった批判もあり、結局寄宿制は廃止され通学制となってしまった²⁷。だが、バッジェ期の教育改革に大きな影響を与えた教育者で、1900年から1916年まで全国視学官を務めたアベル・ペレス(Ábel J. Pérez)は、カリキュラムが詰め込み式で実践的ではないという批判には共感していたが、寄宿制は支持していた。実際、通学制になったことで女子師範入学者が首都の中上流階級出身に著しく偏るという弊害が現れていた。ようやく1912年になって、全国公教育局は教員免許を持たない教師が多い6つの県(意外にも最も発展したコロニアとミナスを含むが、残りは国境地帯のリベラ、トレインタ・イ・トレス、セロ・ラルゴと北部のタクワレンボ県)に師範学校をつくるよう政府に強く促した(入学年齢は男女とも15歳以上に統一した)。教師のための年金制度も改善され、師範学校には首都だけでなく各県から最も優れた学生が集まった(しかし教員免許は依然として大学の学位と同等にはみなされなかった)²⁸。改革の甲斐あって、全国の小学校数は1899年の562校から1912年には1,012校へ、生徒数は同じく52,606人から87,548人へ、学校予算も809,470ペソから1,918,017ペソに拡大している²⁹。さらにバッジェは、海外在住の地主の土地と海外に本部がある企業の所得税を二倍にすることで、1916年に幼稚園から大学までの教育を無償化した³⁰。視学官のペレスはあらゆる階級の代表がいる公立学校こそが民主主義を生む、ネーション・ビルディングと民主的な制度の確立がひときわ重要な挑戦である、と考えていた³¹から、小学校教育の普及は重要な成果といえよう。ハコボ・バレラと同じようにペレスにとっても、教師とは民衆の非識字ばかりかクレオール・エリートの無知と横柄さや反乱を常とする文化を根絶する文明化の先兵であり、農村部の女性教師は前線の兵士と同じだった³²。

職業教育の改善もバッジェ時代の大きな成果であるとされる。1879年設立の美術工芸学校は、軍、司法・宗教・公教育省、国家慈善委員会と目まぐるしく監督官庁を変えたが、内実は不良を矯正する寄宿学校だった。それが産業省の管轄下に置かれ、ウィリマン大統領時代に改革が始まり、著名な画家にして政治家のペドロ・フィガリ(Pedro Figari)が校長になり、真の意味での美術工芸の職業学校となった。フィガリは「芸術」と実用技芸の区別は無意味だと考えていた。また、彼は都市と農村の分割やヨーロッパの物まねをやめ、自国や南米地域の原料や天然資源、デザインや装飾を用いて、ウルグアイや地域の財産を開発していきたいという、ナショナリスト、リージョナリストの発想をもっていたという。そのため学生たちは先コロンブス

文明の工芸品をラ・プラタ博物館に見学に出かけたりもしたという³³。

しかしバッジェの政治の最大の特徴は、徹底した政教分離・世俗化であろう。1830年の憲法ではローマ・カトリックを国教と定めていたが、すでに19世紀からこれは論争の的になっていた。(意外にも)政教分離はサントスの独裁政権下で進み、1885年には法律婚が義務化されている³⁴。バッジェは公式行事から宗教行為を排除し、軍隊付き司祭を廃止し、軍法の世俗化を行い、1912年には離婚法も制定した。教育の分野でも、キリスト教圏の多くの国と同じように、世俗の公教育を推進したい人々と教育の自由を大義名分に宗教教育を温存したい人々が対立していたが、バッジェはまず公教育から宗教教育を排除し(1908年)、次いで私立学校の宗教教育を規制しようとした。新しく1918年につくられた憲法では、第5条で信教の自由が保障されている³⁵。バッジェが教育から宗教を排除しなかった理由は、カトリックの教義が科学と相いれないからだけではない。国家と宗教の一体化は人々の政治的権利を侵害するものだと考えていたからである³⁶。

3.『風景』と『英雄』—ナショナリズムの必須コンテンツ?

ナショナリズム研究の近代主義者を批判し、近代以前から存在するエスニックな要素に注目したアンソニー・スミスは、ネイションには伝説と風景が必要であるという。ネイションに関する伝説—神話は、私たちの共同体が①いつ生まれたか、②どこで生まれたか、だれが私たちを生んだか、④私たちはどこをさまよったのか、⑤私たちはどのようにして自由になったのか、⑥どのようにして偉大な英雄になったのか、⑦どのようにして衰え、征服され、または亡命したのか、⑧どのようにしてかつての栄光を取り戻すのか、といった要素を持つ。そして②と④以外は、人間を超えるものや『英雄』の媒介と刺激が必要だ、という³⁷。「英雄は、共同体が主張する『真の』資質を、純粋な形で体现する存在である³⁸」。そして、あるネイションにとっての聖地・建物・自然の姿は、共同体の歴史の象徴的な危機や劇的な出来事や転換点を思い起こさせ、創造のエネルギーの焦点となることによって、共同体の境界を定め、共同体を「位置づける」³⁹。

ウルグアイにとっては上記にあげた神話の要素のうち、そもそも①と②、すなわちネイションが誕生した「時」と「場所」からして自明ではなく、コロラド党とブランコ党の間にコンセンサスがなかった。⑥の英雄についても同様だ。ラ・プラタ川東岸を併合したブラジルに対して独立を求めて蜂起した33人のオリエンターレス(東方人)のうち、ブランコ党にとっては1830年8月25日にブラジルからの独立を宣言したラバリェッハ(Juan Antonio Lavalleja)が英雄だし、コロラド

党にとっては1830年憲法によって初の大統領に就任したリベラ(Fructuoso Rivera)こそが英雄である⁴⁰。ただし厳密に言えば彼らもブラジルから独立してアルゼンチンの連合州への帰属を求めたのであって、「独立」の英雄とはいえない⁴¹。ウルグアイの歴史家カエターノは、1919年に国家祝日法ができ、さらに同年に国民党議員から(さまざまな祝日の提案の一つとして)8月24～26日を独立記念日とする法案が出された時、バッジェ派はこれには全く賛成できなかったことを指摘している。バッジェ派にとっては、独立記念日は憲法が公布された1830年7月18日でなくてはならない。国民党はカトリック教会と、宗教右派のミニ政党である市民同盟も味方につけて、バッジェ派に強硬に反対した⁴²。結局、8月25日が独立記念日、7月18日は憲法記念日となっている。

英雄についてはどうか。党派性のない人物として選出されたのはアルティガスである。彼はたしかにスペインに対しては蜂起した。しかし連邦制を主張したためにブエノス・アイレスの中央集権派と対立し、ポルトガルの侵略をうけて1820年に敗北すると、パラグアイに亡命し、そのままかの地で1850年に没した。つまりウルグアイの「独立」とは直接関係がない。しかしブラジルからの独立を宣言した33人のオリエンターレスでは、先述のように党派争いが避けられない。そこで古くはバレーラ派の支持を受け、サントス独裁政権下でアルティガスの神格化が進んだ。サントスは1884年にパラグアイからアルティガスの遺体を移送し、モンテビデオの大聖堂で葬式を執り行い、国民の服喪を宣言した⁴³。しかし「アルティガス＝ガウチョ＝野蛮」のイメージが問題だった。ブエノス・アイレスの中央集権派やのちにはサルミエント、ミトレも「欧州文明を体现するブエノス・アイレスに逆らった地方の連邦主義者は野蛮である」という言説を流布させていた。バレーラと近しく「大衆教育友の会」の一員であったアルゼンチン人のベラ(Francisco Antonio Berra)も、著書『ウルグアイ東方共和国歴史素描』でアルティガスを土着の野蛮さの体现者として描いている。多くの学校で副読本に使われていたこの本の第3版が出たのは、おりしもサントス政権下でナショナリズムが盛り上がっているさなかだったので、ベラの解釈は反発を招き、この本は学校から追放された⁴⁴。ラミーレスとバウサ(Francisco Bauzá)は、アルティガスのイメージ転換を試み、退化した植民地帝国の権威を、至上の連邦的民主主義に転換する先駆者として、また、ブエノス・アイレスを裏切ったのではなく、ともに戦いスペインに決定的な打撃を与えた人物として描いた。それはやがて教科書の記述にも反映された、とヘンチュケは指摘している⁴⁵。

だが、ラミーレスはアルティガスが連邦主義者だったことや民主主義を目指していたこと、社会改革を計

画していたことには触れていない。それらの価値は知的エリートや商人・地主の利害(彼らの利害はむしろブエノス・アイレスやポルトガルと一致)と反するからだという。アルティガスに「人々のための政治家」「メシア」のイメージが付与されたのは、社会改革を志向したバッジェ政権の下であった。そのなかで、アルティガスは「ラ・プラタ地域全体の解放者」に位置づけられていく。サントス政権下で計画されていた、アルティガスの銅像を建立する計画も、1913年に国際コンペが行われて本格化した⁴⁶。

風景についてはどうか。バッジェ主義を分析したカエターノも、独立百周年を記念して出版された本を文化地理学的観点から分析したジョドロウヌも、「領域」観念や記念行事の構成をめぐって、バッジェ派と国民党の間に対立があったことを指摘している。ジョドロウヌは、バッジェ派にとって領域とは、そこで権利が行使できる空間で独立国家の前提条件なのに対し、バッジェ派と対立した国民党の保守的なエレラ派にとっては、土地とそこに住む共同体の結びつき、始原の神話とアイデンティティ、歴史的な記憶が重要だったと指摘する⁴⁷。まさに、アンソニー・スミスの言う市民的領域的なネイションと血統的なネイションの違いである。ゆえに、百周年記念行事の構成についての考え方も、バッジェ派が社会改革のモデル志向、未来志向なのに対し、国民党は民族と祖国、歴史と伝統を志向するという方向性への対立があった⁴⁸。記念本の中には、美しい自然風景を切り取ったものだけでなく、地方を写した何の変哲もない風景写真がいくつもあるという。しかしジョドロウヌは、タクワレンボ県のエデン渓谷の写真のなかに鉄道と電柱が映っているのは、自然と進歩が調和し、都市と農村が結び付けられ、牧歌的な国家が産業的に進歩を遂げていることを象徴しているのだという。また、なだらかな丘陵を背景にして木のそばに男女がたたずむスナップショットは、道路や鉄道といったインフラが整備されたことで都市の中間層が田園を観光地としてとらえ、各地に赴いて領域の多様性を知ることができるようになったことを示すのだと指摘する⁴⁹。

国会議事堂は、社会の多様な声を反映させる場所として、政治的安定の象徴として、国民統合のシンボルとなる。百周年記念本でも「アメリカ大陸で最も完璧で、世界で最も壮麗なモニュメントのひとつ」と評されたという⁵⁰「議会宮殿(Palacio Legislativo)」は、壮麗な新古典主義様式で1925年に竣工し、なだらかな坂を上った小高い土地にそびえたち、遠くからでもよく見える。まさにウルグアイのランドマークである。

4. 想像の共同体から排除される人々

こうしてウルグアイでは、バレーラからバッジェへとつづく学校を通じたネイション・ビルディングが行

われたわけだが、彼らが描いた共同体からは、先住民と黒人は巧妙に排除されている。先住民は未開人、法を知らず醜く危険な野蛮人扱いである。ヘンチュケは、ウルグアイの教科書には征服者ファン・デ・ソリス(Juan de Solís)が殺害されたことは載っているが、1831年に行われたチャルーア族のジェノサイドについては載っていないと指摘している。教科書の中のチャルーア族は、侵略者から領土を守って初期のオリエンターレスらしさを体現したが、文明国の一員ではない、とされ、絶滅は不可避であったと結論づけられる、黒人についてはさらに冷淡で、奴隷制廃止については言及されるが、現状には触れない⁵¹。ヘンチュケもカエターノも、他の米州諸国は先住民問題、黒人問題に悩まされているが、ウルグアイはそれを免れている、それは文明化にプラスなのだ、という見方がつよいことを指摘している⁵²。先住民と黒人は「見えざるウルグアイ人」となった。

移民も選別した。まず1890年にはアジア・アフリカ系の移民の入国を禁止し⁵³、1920年代には中東欧からの移民も拒否した。1932年、1936年には「好ましくない移民」についての法律も可決された⁵⁴。

こうして、まさにヘンチュケの言う「アルティガス主義で、白人、(ルーツはさまざまな)コスモポリタンで教育を受けたウルグアイ人」というイメージが出来上がり、それがまた学校を通じて流布されていくのである。

おわりに

以上、ヘンチュケの研究に基づいて、ウルグアイにおける学校を通じたネイション・ビルディングのプロセスを、バレーラの改革とバッジェの改革の連続性を意識してふりかえてみた。キリスト教圏で公教育が普及していく中で必ず問題になる、教育の世俗化についても注目した。彼らは2人とも、カウディーリョの反乱を押さえて安定したウルグアイをつくるためには、国民を文明化しなければならないと考えていた。また、小国ウルグアイが目指すべき理想として、スイスをあげていることも共通する。バッジェの改革がバレーラの改革の延長線上にあることは、ハコボの元で神格化が進み、教室に掲げられるようになったホセ・ペドロ・バレーラの写真が、バッジェ期になっても(たとえ十字架は撤去されても)掲げられ続けていたことからわかる、とヘンチュケは指摘している⁵⁵。

一方で、本稿ではバレーラやバッジェが「何をしたか」という事実関係の整理に終わり、彼らの教育に対する考え方や、背景にある思想にまで踏み込んで論じることができなかった。とくにバッジェに大きな影響を与えているクラウゼ主義は、バッジェのみならず同時期のスペイン、南米に大きな影響を与えているというが、日本でその影響が体系的に論じられたことはま

だないのではないか。

全ての国民にとって尊敬できる人物として、アルティガスが「独立の英雄」に祭り上げられていく長いプロセスについても概観した。意外にもそれが始まったのはサントス独裁のもとであった。サントス政権下では政教分離も始まっている。バレーラの教育改革が始まったラトーレ政権も含め、軍人独裁の時代における「近代化」について、再考する必要がある。

アルティガスは、今もウルグアイにとってバッジエと並んで偉大な国父である。歴史上初めて自由で公正な直接選挙で二回目の当選を果たした拡大戦線のタバレ・バスケス(Tabaré Vázquez)は、議会での就任演説で「アルティガスは人民の権利を熱心に擁護した」「アルティガス主義者にとって、人民の権利とその行使の根本的な柱となるのは統合、『偉大な祖国』だ」と述べ、「ここに我々のアイデンティティ、原則、価値観の原点がある」としている⁵⁶。だが一方で、アルティガスの理想とは異なり、バレーラやバッジエが共同体から排除して考えていた先住民や黒人は、依然として「見えざるウルグアイ人」であり続けている。

注

- 1 ベネディクト・アンダーソン(白石隆・白石さや訳)『定本 想像の共同体』2007年、書籍工房早山(Benedict Anderson, *Imagined Communities, New Materials, 2006, Verso.*)、24-26頁。
- 2 増田義郎編『新版世界各国史 ラテンアメリカ史II』2000年、山川出版社、269頁。
- 3 アーネスト・ゲルナー(加藤節監訳)『民族とナショナリズム』2000年、岩波書店(Ernest Gellner, *Nation and nationalism, 1983, Blackwell Publishers*)、47頁。
- 4 同上、94頁
- 5 同上、58頁。
- 6 Jens R Hentschke, *Philosophical Polemics, Social Reform and Nation-Building in Uruguay, 1868-1915, : Reforma Vareliana and Batllismo from a Transnational Perspective*, Nomos Verlagsgesellschaft, 2016.
- 7 *Ibid.*, p.202.
- 8 *Ibid.*, pp.125-131.
- 9 *Ibid.*, p.107.
- 10 *Ibid.*, pp.153-154.
- 11 *Ibid.*, pp.155-156.
- 12 *Ibid.*, p.158.
- 13 *Ibid.*, p.159
- 14 *Ibid.*, pp.177-178, p.182.
- 15 *Ibid.*, pp.186-187.
- 16 *Ibid.*, p.159.
- 17 *Ibid.*, p.199.
- 18 *Ibid.*, pp.202-207.
- 19 *Ibid.*, p.316.

- 20 増田、前掲書、335-336頁。反乱は1903年と1904年に起きている。
- 21 Hentschke, *op. cit.*, pp.300-303.
- 22 *Ibid.*, 2016, p.299.
- 23 *Ibid.*, p.307.
- 24 *Ibid.*, pp.284-285.
- 25 *Ibid.*, pp.309-310.
- 26 *Ibid.*, pp.286-287.
- 27 *Ibid.*, pp.286-289.
- 28 *Ibid.*, pp.333-337.
- 29 *Ibid.*, Table 8. p.332.
- 30 *Ibid.*, p.341.
- 31 Gerardo Caetano, *LaRepública Batllista*, Ediciones de la Banda Oriental, 2011, p.227, Hentschke, *Ibid.*, p.328.
- 32 Hentschke, *op. cit.*, pp.328-329.
- 33 *Ibid.*, pp.341-343
- 34 Luis María Delio Machado, *Nuevo enfoque sobre los orígenes intelectuales del batllismo*, Fundación de Cultura Universitaria, 2007, p.260.
- 35 *Ibid.*, pp.285-288, Caetano, *op. cit.*, pp.221-225
- 36 Machado, *op. cit.*, p.278.
- 37 アンソニー・スミス(巢山靖司・高城和義他訳)『ネイションとエスニシティ』1999年、名古屋大学出版会(Anthony D. Smith, *The Ethnic Origins of Nations*, 1986, Blackwell)、225頁。
- 38 同上、230頁。
- 39 同上、221頁。
- 40 Hentschke, *op. cit.*, 317.
- 41 Jens R Hentschke, Artiguista, White, Cosmopolitan and Educated: Constructions of Nationhood in Uruguayan Textbook and Related Narratives, 1868-1915, *Journal of Latin American Studies*, Vol.44, 733-764. 2012.11, p.743.
- 42 Caetano, *op. cit.* pp.118-125.
- 43 Hentschke, 2012, p.745.
- 44 Hentschke, 2016, p.182, Hentschke, 2012, pp.744-745.
- 45 Hentschke, 2012, pp.744-745.
- 46 *Ibid.*, pp.746-747.
- 47 Carla Giadroni, Territorial Imagination and Visual Culture in the Centenary: The Construction of the National Landscape in Uruguay's Centenary Book (1926), *Journal of Latin American Cultural Studies*, Vol.20. No.4, 2011, pp.355-375., p.365.
- 48 *Ibid.*, p.357, Caetano, *op. cit.*, p.122.
- 49 Giadroni, *op. cit.*, p.363.
- 50 Caetano, *op. cit.*, p.141.
- 51 Hentschke, 2012, pp.750-752
- 52 *Ibid.*, p.749, Caetano, *op. cit.* p.113
- 53 Hentschke, 2012, p.753.
- 54 Caetano, *op. cit.*, p.114.
- 55 Hentschke, 2012, pp.758-760.
- 56 ウルグアイ大統領府ウェブサイト 「議会における大統領演説」<http://www.presidencia.gub.uy/> 2015年3月3日閲覧。